ウイルス禍の中の思いやり

校長　吉田　隆

ウイルス禍の二年間。対面でのかかわりが制限され、心のつながりも希薄になっているように感じます。そのせいでしょうか。感情に任せて他者に危害を加えるような事件も目立ちます。

一方、閉塞した状況下でも、心温まる出来事も様々あります。

立ち往生の高速道で

一年前、ウイルス禍の中の豪雪という厳しい冬、高速道で立ち往生が頻発しました。菓子販売会社のトラックが二十四時間以上動かない高速道路内にいました。「配達は困難、周囲は食料が足りない」と判断し、ドライバーは本社へ連絡。社長の指示で積み荷にあったお菓子を配ることにしました。

車の中で缶詰状態になっていた方々から、このような声が届いたそうです。「ドライバーさんが何キロも歩いて配っていました。ずっと何も食べていなかった。助かりました。」「イチゴ大福。痺れるほど美味しかったです。」

お菓子をもらった人たちの表情が目に浮かんできます。

バスの運転手さんの一言

私が、半年ほど前にバスの中で遭遇した出来事です。土曜の午後、バスは西大通りを古町方面に向けて走っていました。あるバス停を出発してすぐに、十メートルくらい進んで停まりました。すると、「急がないでいいですよ。待ってます。」という車外スピーカーからの優しい声。後方の窓から、壮年の女性が早足でバスを追いかけてくるのが見えました。ステップを上り、息を切らせて「有り難うございました」の一言。ウイルス禍で私語は厳禁のバス内ですが、ホッコリとした空気が流れました。

たんぽぽにこにこカード

新潟小学校には、友達への感謝の気持ちや良いところを伝えるための、「たんぽぽにこにこカード」があります。

「登校途中で、いつも話しかけてくれてありがとうございます。とてもうれしいです。」

「そうじの時、いっしょに机を運んでくれてありがとう。助けてくれてありがとう。」

実は校長の私にも、時々届きます。

「いつも全校朝会で、ためになるお話をしてくださり、ありがとうございます。ぼくも先生みたいにがんばります。」

マスクで表情が読み取れず、全校朝会の話が子どもたちに伝わっているのか危惧していましたが、とても嬉しいメッセージでした。

閉塞状況の今こそ、思いやりを言葉や行動で表現し合い、心のつながりを保っていきたいものです。